

# 「想作天文学」顛末記

平 林 久\*

「天文月報ですか？送られてきますけれど、ほとんど読みませんねえ。」とは、筆者が編集部の末席をけがしていることを知らない学会員の言葉だ。どこの学会誌もこんな宿命を負い、編集部の人々はまた来月号出版のために追われるようだ。

この一年間、天文月報の最後のページ、いわゆる天象欄のあるページをお読みになったことがおありだろうか？「想作天文学」、これである。少し楽しいものも、というところで企画され、一年間続いた企画である。本文は、この顛末記である。

内容は天文に関したものであれば筆者の自由としたが、一、二、三月号と出るにしたがって次第に性格がたちづくられた。全 12 作の題と作者名（ほとんどはペンネーム）を、再度かかげてみよう。

- |                                      |                |
|--------------------------------------|----------------|
| 1 月号「赤い星シリウス」                        | 天狼星人           |
| 2 月号「ディスカバリー号の発見」                    | HIRAX          |
| 3 月号「重力兵器レーザー砲」                      | グラビティノー        |
| 4 月号「SF と天文学」                        | クライン・ユーベルシュタイン |
| 5 月号「南北天文学戦争」                        | ZYXW           |
| 6 月号「安全弁」                            | イカレス           |
| 7 月号「イーハトーボ」                         | SUGAWA         |
| 8 月号「レチクル座」                          | GOLOXY         |
| 9 月号「近距離星の夢」                         | 石原藤夫           |
| 10 月号「Unidentified Signaling Object」 | 呉能鐘            |
| 11 月号「台風シーズン」                        | ラ・プラズマ         |
| 12 月号「一つ目の撃事件」                       | MM             |

さまざまなものがならんだことである。世話人を引き受けた筆者としては、それぞれ思い出深いものである。

一作「シリウスの謎」。これは光学天文の方には好評のようであった。本誌 1982 年 10 月号でプロトマイオスの「アルマゲスト」を評した齋藤国治氏も、トピックスとして、シリウスが各所で、「hipokeros (赤い、黄色い、銅のような)」と記されていることを上げておられる。

二作目の「ディスカバリー号の発見」は、宇宙に浮かんだルネベルグレンズを主題としたものである。9 作目を執筆された石原藤夫氏は近作の SF 単行本「横須賀カタパルト」で、このアイディアをとり入れておられ、巻末に HIRAX 氏の本名をあげて引用しておられる。

4 作目のクライン・ユーベルシュタイン氏と 9 作目の石原藤夫氏はそれぞれ何冊も SF をものにしておられる。クライン・ユーベルシュタイン氏が「私の SF 製作手法」と題して親しく講釈して下さったことがあるが、そのう

ちのテーマ選びについて書かれたのがこの部分だといってよいだろう。

SUGAWA 氏と ZYXW 氏はそれぞれ位置天文にたずさわってこられたかたがたである。水沢の風土とそこに輩出した三人を時系列でとりあげた「イーハトーボ」。「南北天文学戦争」のテーマとなった座標系のとりかたについては今年度春季学会において作者自身が講演された。

3 作目のグラビティノー氏はイタリア留学直後でもあり、重力に興味を持っておられるので内容もペンネームも、これにふさわしいものとなった。ここに登場する重力兵器は「レーザー砲」と名づけられているが、グラビティとレーザーを瞬間接着剤でくっつけたような名前となっている。最近、Solar Power Station (宇宙発電衛星計画) のことがしきりにいわれる。ここではエネルギーはマイクロ波ビームとして地上に送られる。このアイディアのものはアメリカのレーザーである。

ペンネームといえば、10 作目の呉能鐘 (くれよしかね) 氏に野辺山宇宙電波観測所でたずねたことがある。

「呉能鐘ってなにに？」

「能鐘はノーベルと読むんや。ノーベル賞くれ、と、こういう意味なんよ。」

11 作目の作者は「台風シーズン」のなかでとりあつかわれるプラズマと「ラブラスの魔」をかけた由、これはお気づきであろう。8 作目の「GOLOXY」氏は、うまく御自分の名をうめこんでおられる。

「レチクル座」、「赤い星シリウス」、「ルネベルグレンズ」などをはじめとして、どこまでが本当かわからないという感想が多かった。どれも意外にかたい話だったのである。石原氏はもっともかたい話を寄せられた。

宇宙からの電波をとらえる電波天文学を舞台とすると、興味は知性体からの信号検出ということになる。本シリーズでは、「Unidentified Signaling Object」と「一つ目の撃事件」がこれである。前者はパルサーを、後者は OH 分子の電波を、宇宙の知性体からの電波としてとらえようとしている。バンド巾の広いパルサーと、バンド巾の狭い OH 線スペクトルの好対称である。知性体はどんな形で信号を送ってくるか知れない。また知性体はどんなものであるかも予測がつかない。だから一見、自然現象としてみなされた宇宙の電波も、よく見直す必要があるというのが両者のテーマである。これで思いだすのは、F. ホイルの「暗黒星雲」であろう。英国の天文の大御所による SF である。

\* 東京天文台 Hisashi Hirabayashi

荘大でせまった内容は、「重力兵器ブレーザー砲」と「安全弁」であろうか？ 雄大無比さを期待して、宇宙論にも造詣深い「呉能鐘」氏にお願いしたが、氏は、パルサーの信号解読の方が好きだったようだ。宇宙現象を地上でシミュレートしようという内容の「台風シーズン」を読むと、一般にふつうの人とは別ものと思われがちな天文学者も、家庭ではまめまめしくたちはたらいっているようである。

「MM」氏は、マリリン・モンローではない。はじめから目をつけてお願いしていたのであるが、奥ゆかしい人でなかなか引き受けて下さらない。毎月毎月、新しい作者をみつければお願いするという攻防のなかから次第に腕がみがかれ、最終回になってはじめて「MM」氏籠絡に成功した。

蛇足に蛇足をかさね、本文もやっとここまでやってきた。12人の作者のかただたのような筆の才があれば、私の人生ももう少しかわっていただろう。最後に、何人かに聞かれた質問。

「……月号の作者だけ？」

そして多くの有益な意見は、

「作品の人気投票をしませんか？」

というものである。これの変形が、

「作者のあてっこをしたら？」

というものである。一般に、作者のあてっこはやった。

しかし全部をあてるのは至難のわざであろう。是非試みられたい。ちなみに、別のペンネームで2作品をよせておられるかたがひとりおられる。ひとりひとりにお礼を申し上げたいが、この方には二重にお礼をのべたい。

さて、今年もいよいよおしせまって、12月号の発刊のはこびとなった。編集会議では、来年のこの欄の企画についても話しあいがはじまっている。

「来年も想作天文学を続けようか？」

「いいけど世話役たいへんだったよ。」

「じゃ他に……？」

「ム……。」

「じゃ又、次回に話しあいましょう。」

そんなわけでいままわりの人に聞いてまわっている。

「ねえ、天文月報読んでる？ もう一本いこうか？」

「巻末まで読んでよね。あ、姉さんもう一本！」

「おすしつまんてよ。想作天文学おもしろかったでしょう？」

「もう一年続けるとしたら、さ、どうぞ、あんたも書いてくれる？」

「あそう。じゃ、他にもっといい案ない？」

「ないの？ じゃ、これ、割りかんにしようね。」

(おわり)

新刊紹介

星の物理 「第2版」 北村正利 著

(東京大学出版会、定価1200円)

1974年に出版された第一版の改定版。データをあらため、装丁を一新し新しいトピックスもとり入れられているが、全体の構成は変えてない。

著者の専門である連星をバックボーンとしながら、銀河内の星ぼしを一般的にあつかった個性ある好著。

(編集部：平林)

お知らせ

天文学将来計画についてのシンポジウム

標記のシンポジウムが日本学術会議・天文学研究連絡委員会の主催で1983年1月11日(火)10:30-17:00に日本学術会議大会議室にてひらかれます。スペース天文学・太陽電波・位置天文学・光学赤外線天文学の計画を主なテーマとして討議が行われる予定です。

1982年10月の太陽黒点 (g, f) (東京天文台)

1	8,	167	6	—,	—	11	—,	—	16	8,	39	21	6,	52	26	9,	143
2	—,	—	7	—,	—	12	11,	54	17	7,	33	22	8,	88	27	11,	160
3	8,	134	8	—,	—	13	12,	83	18	5,	21	23	12,	84	28	9,	112
4	9,	97	9	—,	—	14	9,	88	19	—,	—	24	9,	100	29	8,	82
5	12,	78	10	8,	80	15	9,	61	20	7,	33	25	10,	129	30	11,	97
															31	5,	47

(相対数月平均値: 125.2)

昭和57年1月20日	発行人	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
印刷発行	印刷所	〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町251	啓文堂 松本印刷
定価 300円	発行所	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
		電話 三鷹 31局 (0422-31) 1359	振替口座 東京 6-13595